６年生　脚本

「小粒の猫」

名前

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 朗読２（分散も可能） | レジスタンスセキュリティー２ | レジスタンスセキュリティー１ | レジスタンス１０ | ジレスタンス９チータ | レジスタンス８ | レジスタンス７ | レジスタンス６ | レジスタンス５ | レジスタンス４ | レジスタンス３ | レジスタンス２ | レジスタンス１ | 団長 | 朗読 | ミキ | グンタ |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| エンディング絵１０枚 | オープニング絵１０枚 | エンディングアニメ約５００枚 | 歌　サブボーカル | 歌　メインボーカル |  | かわいたガール３ | かわいたガール２ | かわいたガール１ | おばあさん２ | おばあさん１ | おじいさん２ | おじいさん１ | 連れ去り子ども２ | 連れ去り子ども１ | カラス３ | カラス２ | カラス１ |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

舞台下の机の朗読にスポット　舞台スライドスタート

♪雨の音

イラストと共に、朗読が始まる

朗読「小粒の雨が降る公園の中、１匹の子猫と、一人の少女の静かな出会いがありました。

　　　少女は子猫に『グンタ』と名づけ、子猫は少女が『ミキ』という名前だと知りました。

　　　ご飯の時も、勉強をする時も、本を読む時も、寝る時も、いつも優しい顔でみてくれる

　　　そんなミキがグンタは大好きでした。

　　　一年、二年、三年・・・二人は幸せな時を刻んでいきました。

　　　ある日から、ミキは悲しそうな顔をしてグンタを見るようになりました。

　　　大学へ行くことになり、遠くのアパートに引っ越すことになったのです。

　　　グンタはよくわからないまま、ミキの元気のない顔をいつも心配そうに見上げていました。

　　　ある日、大粒の涙を流しながら、ミキはグンタをだきしめ

「ごめんね。」

と小さな声で言うと、車に乗りました。

車にはミキの荷物が山ほど積んでいます。

　　　グンタは嫌な予感がしました。

　　　車のエンジンがかかり、家の人はみなさびしい笑顔でミキに手を振っています。

　　　さらに嫌な予感がしました。

　　　車は動き出し、朝日の方向へと走りだしました。

　　（ミキにもう会えない）

　　　そんな気がして、グンタは空いている玄関の隙間から外へ飛び出しました。

　　　車が見えなくなっても、グンタは走り続けました。

息が切れても、走り続けました

大好きなミキに会うために

幕は閉じたまま、幕前で

　　　照明オフ：グンタにスポットのみ

♪：夜の音

グンタ、上手からヘロヘロになって走って登場　探しながら走り続け

　　　舞台下で

グンタ「はぁはぁ・・・全然、おいつけないや。ミキ〜ミキ〜どこいったんだよ〜」

　　　　あたりを見回す。座り込みながら

グンタ「ここは・・・どこ？くらい・・・さむい・・・お腹もすいてきた。」

　　　♪：カラスの音がどんどん大きくなってきて

　　　カラス三人組、グンタを取り囲みながらぐるぐる回る

カラス１「カーカー！お前だれだ！」

カラス２「カーカー！お前だれだ！」

カラス３「カーカーお前だれだ！」

カラス１２３「誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ」

　　　　　　　ピタッと止まってシーンとまつ。

グンタ「ねこの、グンタです。」

カラス１「ねこだ」

カラス２「ねこだ」

カラス３「ねこだ」

カラス１２３「ねこだねこだねこだねこだねこだねこだねこだねこだ」

　　　　　　　ピタッと止まってじっとみる

グンタ「ねこ・・・です。」

カラス１「ここ、俺たちの縄張り」

カラス２「縄張り」

カラス３「縄張り」

カラス１２３「縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り」

　　　　ピタッととまってにらむ

グンタ「すみ・・・ません？」

カラス１「出てけ」

カラス２「出てけ」

カラス３「出てけ」

カラス「出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ」

　　　　突きながら追い出し、満足して帰っていく

グンタ「はぁはぁ、、、もう、歩けないや、体中がいたい、誰か・・・たすけて」

　　　　バタンと倒れ、しばらくすると下手から団長登場

団長「くんくんくんくん・・・人間臭い、人間臭いぞ。」

団長「くんくんくん・・・うわ！びっくりした！なんだ、ボロ雑巾かと思ったらねこじゃないか。

　　　小僧、名前は。」

グンタは寝ながら

グンタ「ぼくは、グンタ。あなたは？」

団長「私か私はしがない猫さ。お前はどうしてそこに倒れている？」

グンタ「ご主人をおいかけてたら、（体をおこし）いててて、道に迷っちゃって。」

団長「なんだ、捨て猫か。どうりで人間臭い。しっしっ、あっちへおいき。」

グンタ「捨て猫？」

団長「はあ？捨て猫も知らないってか。めでたいやつだ。あっちへおいき。」

グンタ「ぼく、ミキって人に会いたいんです。緑色の車に乗って、朝日の方へ走っていった車、みませんでしたか？」

団長「おいおい。待て待て待て待て、お前、何言っているかわかっているのか？

　　　　お前はね、捨てられたの。」

グンタ「ぼくが、捨てられた？まさか。」

団長「いたたたたー。いるんだよねー。そういう痛い猫。

　　　　お前、ご主人との出会いは？」

グンタ「雨の日に公園で、拾ってもらいました。」

　　　　ここから、情緒不安定な団長の演技が始まる、喜怒哀楽を全て出す。

　　　　グンタをつついたり、いかったりしながらめちゃくちゃな演技をする。

団長「はいビンゴ。痛い猫決定〜！気付こうよ。だんな。もういい歳なんだから。

　　　　いいか、お前は公園で拾われた。そして、ちょっとの間それはそれは大切にされた。

ああー幸せ幸せ。

　　　　毎日美味しいご飯、毎日なでなで。散々偽りの愛情を注ぎこまれある日、

飼えなくなって、ぽーいだ！

　　　　人間はな、忘れるんだよ。都合よくな。

　　　　お前のご主人はもう、お前のことなんか忘れている

　　　　今頃、明るくて、あたたかーい部屋の中でな！

　　　　それに比べお前はどうだ、くらーくて、さむーい道を散々走り、散々探し、この様だ

　　　　はあ、悲しい。人間は忘れ、お前は気づかない。そう、

　　　　お前は人間に忘れられたこともわすれたあわれな猫なんだよ！

おっと、いかんいかんいかん、言いすぎた。もう、つかれただろう？今日はお休み。

　　　　私の仲間の所へ案内しよう。そこで、何もかも、忘れよう。」

グンタ「ぼくは・・・」気を失う

団長「ほう、疲れすぎて、気を失ったか。こいつは芯が強そうだ。よもすれば立派な反乱分子に育つやも知れぬ・・・ふふふ。連れて帰るか。」

開幕

　　　♪：酒場

幕が開くとレジスタンスで宴の真っ只中の演技を行う（三十秒くらい）

団長「諸君、諸君、明るいニュースの時間だ！」（会場、静まり返ったあと、盛り上がる）

団長「我らが同胞が今宵また一人増えた。名前がグンタ！」

レジ全「うおー！ぐーんた、ぐーんた！」

団長「では、グンタより一言！」

　　　　騒がしい空間が一気に静かになる。案内猫、グンタをこづきながらささやく

団長「ほら、ここが我らが聖地、レジスタンスの集いだ。なんでもいい、あいさつをしろ。」

グンタ「え？いや、あの−。はっそうだ。」（困惑〜決意の表情）※会場再び少し騒がしく

グンタ「みなさん、ミキっていう女の人を見かけませんでしたが、緑色の車にのった。

　　　　ぼく、その人を探しているんです。」

　　　　会場、凍りつく

レジ１「お前・・・今・・・なんつった？」凄みながら近づく・

グンタ「ぼく、ミキっていう人に会いたいんです。」

　　　　しばらくの沈黙、レジスタンス、お互いの顔を見合わせてためを作った後、

レジ全「だはははははは」思い思いに大爆笑

　　　「にーんげん、に、にーん、にーんげん」と言いながら笑い続ける。

レジ１「ひーひー、お、お前さ、人間なんか探して、どするのよ？」席に戻る

レジ２「だって、お前あれだろ？」

レジ３「捨て猫ってやつだろ？」

レジ４「もう無理じゃん。探したって、意味ないじゃん。」

レジ５「また、捨てられて、ぽーいだ。」

レジ６「ちょっと、団長、どうしてこんなやつ連れてきたんすかー？」

レジ７「勘弁してくださいよー」

レジ８「こんなやつ無視して」

レジ９１０「飲み直そう！うえーい！」

　　　　　　再び、宴が始まる。（レジスタンス、会話を始める）

グンタ「みなさん、僕のはなしを聞いてください！どうしたら、ミキに会えますか？」

　　　　地面を踏みながら話すが、完全に相手にされない

　　　　色々なレジスタンスの前に行くが、相手にされない

グンタ「みなさん！」

グンタ「団長さん！」

団長「そう熱くなるな、グンタよ。ここにいるネコらはな、お前の考えている以上に人間にひどい

　　　こと、つらーいしうちをうけて今、ここにいるんだ。お前にはわかるまいことなのだよ。」

グンタ「人間がひどいことを？ぼくにはわからない。」

団長「そのうちわかるさ、ここはな、人間に憎しみをもったネコたちの集まりなのさ。」

グンタ「憎しみをもって、何をしようっていうのですか？」

団長「ふふふ、今は何もできないさ。今はな。」

　　　　♪：サイレン

　　　　　色々なレジスタンスが、報告をしにくる

セキュ１「敵襲、敵襲、警戒レベル３！」（パソコンを操作しながら）

セキュ２「かわいたガールの到来です。」

セキュ１「フォーメーション５」

セキュ２「２匹で適当にかわいがられ、去って行ってもらう作戦を決行します。」

セキュ１「レジスタンス３番、４番、直ちに配置についてください。」

セキュ２「敵、かわいたガールは三人の模様です」

　　　　レジ３４が上手へスタンバイ、それ以外は段ボールに隠れる

グンタ「な、何があったのです？」

団長「人間がこの基地に入ってきたのさ。かわいたガールか、大したことはない、ちょうどよかった。グンタ、こっちへこい。見ていくといい。人間という生き物を。」

　　　ガールが、ひな壇下手から登場

ガール１「みてーみてーねこちゃんがいる」

ガール２「ほんとだー。ちょうかわいいんだけどー。」

ガール３「きゃーなでなでしたーい」

ガール全員「かわいいー」

団長「グンタよ、お前にはどう見える。」

グンタ「うーん、ただ、かわいがっているようにしか見えませんが。」

団長「ああ、やはりな、お前は人間と長くいすぎたんだ。我々にはこう見え、聞こえるのだよ」

　　　団長がパチンと指をならすと　一瞬暗転して　最初からやり直す

ガール１「うわ〜きたないのらねこー」同じ表情だが、トーンが違う

ガール２「ほんとだー、ちょう気持ち悪いんだけどー」

ガール３「きゃーさわらなきゃだめなのー？」

ガール全員「かわいいーって言っている自分が〜一番かわいいー！」（女声から男声へ）

団長「これが、人間の姿だ。あいつらは、すーべーて自分のために生きている、我々は利用されているんだ。」

グンタ「まさか、僕のご主人は、ミキはこんなこと、思っていません。」

団長「まだそういうか。」

　♪：サイレン

時間・余裕があれば、ここにもう一つの人間コントを入れる。または、ガールの会話を増やす。

　セキュ１「敵襲！敵襲！警戒レベル７！」

　セキュ２「連れ去り子どもです。」

　セキュ１「我々を連れ去って、飼おうとするが」

　セキュ２「親に「うちでは飼えないからその辺に捨ててきなさい！」って言われ」

　セキュ１「平気で違うところへ捨てる、タチの悪い連中です。」

　セキュ１「フォーメーション１７」

　セキュ２「武力行使による、追い出し作戦に切り替える」

　レジ全「うおー」

　グンタ「いったい、何が始まるんです？」

　団長「見ていくといい、我々の力を、お前はかくれておきな」上に手をかざす

　　　　　猫たち、段ボールのかげに隠れる（チータは便乗して上手へドロン）

　　　　　子ども１２下手から登場

　子ども１「絶対このへんにいたんだって。」

　子ども２「うそつけー猫が１０匹以上なんているわけないじゃん」

　子ども１「見たんだって！」

　子ども２「ほらみろ、１匹も・・・あ、ねこだ。」

　　　　　　ねこたち、段ボールの前まで出てくる「ニャーニャー」可愛い声を出しながら

　子ども１「ほら、いっただろ。うわあすごい数だね。」

　子ども２「よし、１匹可愛いの選んで、連れて帰ろうぜ」

　　　　　　子どもが１匹の猫に近づくと

　　　　　　♪：踊る大捜査線＋ちょっとした決めポーズの後

　　　猫たち全員武器を一斉に構え静止（喉元に銃口や刀）こだわりシーン

レジ３「出て・・・いきな。」

レジ全「出て・・・いきな。」

子ども１２「ひ・・・・ひぃ〜」

　　　　　　下手へ逃げていく

レジ全「うおおおおお！」

　　　　ねこ、全体で喜ぶがレジ８は仲間のチータがいないことに気づく。

レジ１０「ちょ、ちょっと待って！」

　　　　静まりかえる

レジ１０「ねえ、チータがいない。」

レジ８「まさか、あいつら、どさくさに紛れて、チータを」

レジ２「ひどい、だから人間は大嫌いなんだ！」

レジ３「もう我慢できねえ！」

レジ４「取り返しにいこう、チータを。」

レジ５「復習してやる！」

レジ全　雄叫びをあげながらしもてへ武器をかざしてドンドンと進む

団長「おい、お前はいかないのか？」

グンタ「ぼくには、ぼくにはやらなければいけないことがある。

　　　　それに、ぼくは、どうしても人間が悪い生き物に思えないんだ。」

団長「ここまで人間の醜態をみてもなおそれか。見損なった、お前に期待したおれがバカだった。今度会った時は、敵だと思え！」

　　　　団長も下手へ怒りながらはけていく。

　　　　しばらく、テーブルにこしかけて呆然とするグンタ。上手からチータ登場千鳥足

チータ「うぃーヒック、ヒック。酔っ払っちまった。飲み過ぎたな。」

グンタ「あなたは？」

チータ「俺かい？俺の名はチータ、お前と同じ捨て猫さ。」

　　　　グンタ、すかさず立ち上がる。

グンタ「チータ・・・みんな、あなたが人間に連れ去られたと思い、怒り狂って外へ飛び出しましたよ！」

チータ「うぃーそれはそれは、ありがたいことで、ヒック。」

グンタ「追わなくていいんですか？」

チータ「おう？なんで？おれ、あいつら嫌いだし。」

グンタ「嫌いって、、でもこのままじゃあの人間の子どもたちも危ない。」

チータ「大丈夫だって、たかがねこ１０匹位じゃなんもできないって。

　　　　俺はね、飲み食いができればどこもなんでもいいの。だから、ここにいるの。

　　　　でも、最近ここの連中危なくなってきたじゃない？だからそろそろ潮時かなって。」

グンタ「まさか、あなたわざと。」

チータ「ままままま、そこはいいとして、だんな。俺はだんなが気に入ったぜ。

　　　　人間に捨てられても人間をなお思う。いやー健気だね。昔の俺にそっくり。

　　　　いったい何があったのか、話してくれねえか？」

　　　　しばし、身振りで会話をするふたり

チータ「なーるほど、ね。ますます気に入ったぜ。しかし、そのミキってやつもいけすかないね。

　　　　なんで、急に遠くへいってしまうんだろうねえ。一緒に連れて行ってあげればいいのにな。

　　　　よし、このチータ様がお前と一緒にそのミキって女を探してやろうじゃねえか。その代わり、一緒に住めるようになったら、ご飯、たらふく食わせてくれな。今日は乾杯だ！」

　　　暗転　この間に段ボールなどを片付ける

朗読「グンタはチータと共にミキを探す旅を続けました。

　　　♪：ブレイブストーリー

　　　の音楽に合わせて実写版の回想シーンをつくる

作るシーン（合成動画）」

険しい山をのぼるシーン

街中で犬におわれるシーン

雪の中寒がりながら進むシーン

グンタとチータが言い争いをしているシーン

グンタとチータが笑い合っているシーン

二人で壮大な夕焼けを見ているシーン

保健所の人間に追われているシーン

団長たちが通り、ひっそりと隠れるシーン

駅のホームで待つシーン

ペットショップを覗き込むシーン

紙に何か書いて街角で聴き込むシーン

夢を語り合うシーン

星空を見上げるシーン

　　　一年、二年、三年の月日が過ぎましたが、ミキは見つかりません。

他アイデア募集（あと５つくらい）

・

・

・

・

・

・

・

　　　何度も何度も心が折れそうになりましたが、

　　　そんな二人を支えてくれたのが

　　　暖かい人たちとの出会いでした」

　　　ライトアップ

　　　舞台下で、カラスに追われる二人

カラス１２３「カァカァカァカァカァカァカァカァ」

　　　　　　　ピタッと止まる

カラス１２３「縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り」

　　　　　　　ピタッと止まる

カラス１２３「出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ」

　　　　追いかける

チータ「いってえ、なんだなんだよ、あいつら」

グンタ「あーあー体中また傷だらけだ。」

　　　♪：お腹の音「ぎゅるぎゅる」

チータ「あーはらもへったー、もう、動けん、ちょっと、あそこの公園で休もうぜ。」

舞台開幕中でゲートボールをしているおじいさんおばあさん

　　　ステージ上をボールが行き交う。それをムズムズしながらみる二人

チータ「な、なんだ、あのじいさんばあさん、棒で玉をたたいて遊んでいるぜ？」

おじ１「くらえ、わしのライジングショット！」球をうつ

おば１「そうはいきませぬ！わたしのホワイトフラッシュ！」球をうつ

おじ２「ぐう、ならばわしのアルティミットボンバー。」球をうつ

おば２「まあ、そうきましたか、ならばわたしのハニーフラッシュ！」球をうつ

　　　　※ネーミングはなんでもいいです。

チータ「なんだ、あのボールは、俺、なんだかムズムズしてきた。」

おじ１「ああ、ミスった〜」

グンタ「ほんとうだ、ぼくもだ、ああ、だめだー。」

　　　　ボールに飛びついて、猫パンチ。みごとにゲートに入る。

おじ１「おお、猫どの、ナイスショットじゃ！お前さんのおかげでたすかったぞい。」

おじ２「おや？このねこ、ケガしとるじゃないか。ばあさん、ばあさん、救急箱。」

ばあ１「はいよー、たしかここに。」

ばあ２「ええと、ねこの傷には・・・」

おじ１「これじゃ。キンカンじゃ。」

おじ２「そうそう、これこれ。刺されたところにぬると」

おじおば「スースーするやつ・・・ちがうちがう。」

おじ２「本当にあんたはだめじゃ。どくのじゃ。きずにはこれじゃ、のどあめじゃ。」

おば１「そうそう、これこれ。これをなめると

おじおば「すーすーするやつ・・・ちがうちがう。」

おば１「ええい、どくのじゃ。これじゃよこれ。」

のようなノリツッコミコントを展開

おじ１「キズテープじゃ」

おじ２「ほうたいじゃ」

おば１「おろないんじゃ」

おば２「消毒じゃ。」

おじ１「ええい、らちがあかんわい。もう全部使っちゃえ！」

おじおば「それじゃ。」

　　二人の腕に包帯をまく（キズテープや、塗り物はぬるふりのみ）

おじ１「こんなもんかいの。」

おじ２「こんなもんよ。」

おば１「もうケガするんじゃないよ。」

おば２「あら、おまさんたち、よくみたら、お腹がへっこんで、はらへっとるんじゃないかい？

じいさん、じいさん、食べ物。」

おじ１「えーとえーと、おおこれじゃ。はい、わしのプロテイン」

おば１「そうそう、これを牛乳に入れて、とかしのむだけで、」

全員「ムッキムキ！ちがうちがう」コントスタート

おじ１「小魚じゃ」

おじ２「ハムじゃ」

おば１「たまごじゃ」

おば２「かつおぶしじゃ」

おじ１「らちがあかんから、全部お食べ」

全員「それじゃ。」

おじ１「こんなもんかいの。」

おじ２「こんなもんよ。」

おば１「それじゃあ元気でな。」

おば２「また、遊びにおいでな。」

　　　　幕が閉まる

　　　　グンタ、チータ、少しポカーンとしてその場をさる。

チータ「なんかよ、俺、ここらへんがポカポカする、なんなんだこの気持ち。」

グンタ「いい人たち、だったね。今度、お礼をしにいこうよ。」

チータ「そうだな。」

　　　少し歩いていくと、♪：遠くから地響き→近づいてくる

　　　上手からレジスタンスの猫逃げようとすると。下手から、さらに逃げようとすると、花道

　　　から団長、そして囲まれる

団長「これはこれは、誰かと思えば、グンタじゃねえか。久しいな。そしてー後ろにいんのは

　　　まさか、いなくなったはずのチータか。」

レジ６「お前、人間に連れ去られたんじゃなかったのか。」

レジ７「お前、俺たちがどれだけ探したのかわかってんのか。」

レジ８「お前、俺たちをだましたんだな。」

レジ６「まあ、いい。今日はいい日なんだ。」

レジ７「二人ともそこをどいてくれねえか。」

レジ８「俺たちは今忙しいんでな。」

グンタ「忙しい？どういうことだ？」

レジ１「俺たちはこれから、あの公園のじいさんたちをやっつけて、公園から追い出すんだ。」

レジ２「あの公園を新しい基地にするのさ。」

レジ３「俺たちは増えすぎた」

レジ４「みろよ、今ではそうぜい５０匹だ。」

レジ５「俺たちには広い住処が必要なんだよ。」

チータ「おい、グンタ、放っておこうぜ、数がやばい。」

グンタ「見てくれ、団長！みんな！この腕を、怪我している僕たちをあの老人の方々は治し、そしてはげましてくれたんだ。人間は悪い人ばかりだけではない、それ以上にいい人がたっくさんいるんだ。どうして、あなた方の目はそう偏っているんだ。」

団長「はぁ〜これだから、人間に飼われた猫はだめだ。だめだだめだだめだだめだ。お前ののぞみは叶ったのか？

　　　あれから何年探している？

何年あきらめかけた？

お前のしょうがいは、人探しでおしまいか。

　　　なぜ、自分のために生きない。

お前はね、わ〜す〜れ〜ら〜れ〜た〜の！

はい、どくどく」

グンタ「嫌だね。僕はあのおじいさんたちに助けられたんだ。絶対にどかない。」

チータ「ちくしょう、だんな、多分勝てねえが、お前さんのいう通りだ。あの世でもどこでも

　　　　ついていくぜ。」

団長「グンタ、俺たちは容赦はしない。命の保証もしない。それでもか」

グンタ「それでもだ。」

団長「そうか、残念だよ。お前の旅はここまでだ。」

　　　取っ組み合いになり怒号が飛び交い、徐々に暗転

　　　少ししてからちょっとずつライトアップ

グンタ「チータ、チータ！」

チータ「グンタ、ボロボロじゃねえか。あいつらは？」

グンタ「お前ほどじゃないよ。団長に噛みつき続け、なんとか帰ってもらった。

　　　　多分、だけど、おじいさんたちは大丈夫。」

チータ「それはよかったぜ。グンタ」間髪入れず

グンタ「チータ、もうしゃべるな。傷がとても深い。」

チータ「いーやしゃべらせてくれ、俺はもう長く、ねえ。

はぁはぁ。グンタ

長い旅の中で俺は気づいたんだ。

　　　　お前のミキへの想いが本気なように、ミキも、お前のことを本気で想っている。

んでな、俺は、思ったんだ。

探すことよりも大切なこと、

それは、相手を信じて待つことなんじゃねか？

ミキは待ってるんじゃねえか？

大好きなお前を見つけた

最初の場所で。

グンタ、きた道は覚えているな

帰ってやれよ

ミキと出会った、あの場所に

グンタ、おれは、嬉しかったんだ。人間も猫も嫌いになっていたのに

気づくとおれはな・・・おれは・・・」

グンタ「チータ？チータ？いやだよ。ぼくをおいていかないでよ。チータ、チータ・・・

うわあああ〜」

　　　　しばらく涙をぬぐう。暗転→チータはける→ライトアップ

グンタ「チータ、ありがとう。ぼく、行くよ！」

　　　　ここからの朗読に合わせて絵

朗読「グンタは走りだしました。ボロボロの体を引きずって

　　　足を前に出すたびに体中には激痛が走ります。

　　　痛くて痛くて、涙が溢れ出てきます。

　　　それでもグンタは走りました。

　　　大好きなミキに会うために

　　　ミキと初めて出会った、公園を目指して。

　　　それから、７日後のことでした

小粒の雨がふる公園の中、初めてミキと出会った場所で

グンタは静かに息をひきとりました。

グンタは息を引き取る少し前に

小さな夢を見ました

　　　段ボールの中から空を見上げると、

　　　かさをさしたミキがグンタをみていたのです

　　　スポットライトのみが二人をてらす

グンタ「ミキ、ずっと探していたよ。」

ミキ「グンタ、グンタ。ずっと探したのよ。ずっとここで待っていたのよ。

こんなに傷ついて・・・こんなに冷たくなって・・・本当にごめんね。」

グンタ「ミキ、泣かないで、やっと会えたんだよ。もっと、喜んでよ。」

ミキ「わたし、結婚して、この公園の近くに住むことになったんだよ。

グンタ、これから一緒に住めるんだよ。

　　　だから、いかないで、目をさまして。」

グンタ「ああ、ミキ全然変わっていないや、よかった。

あれ？なんだか眠いや。ぼく、寝るね。」

ミキ「グンタ、グンタ・・・」

　　　Ｆ９のエンディング曲スタート＋エンディングムービーも

朗読「気がつくと、グンタは、暗闇の中泡に包まれ、光あふれる場所へと向かい、泳いでいました。

　　　グンタは自分が何かに生まれ変わるのだと確信しました。

　　　光はどんどん強さを増していきます。

　　　まぶしさになれ、グンタがうっすらと目をあけると

　　　そこには涙を目に浮かべたミキの姿がありました。

　　　グンタは堪えていたものを一気に吐き出すかのような

　　　元気な産声をあげたのです。」

　　　エンディング

ミキ

ぼくね

迷いかけた時

諦めかけた時

心の中で

歌を歌ったんだ。

前に進むために

♪：エンディングソング１番

　　ここでは、エンドロールが流れ

　　キャスト紹介

　　エンディングソング２番

　　ここでは、学芸会練習風景や

　　クラスの様子が流れる

　　最後のサビは二人で生歌（状況によるが）を歌ってそこへ

　　全員出てきて

　　カーテンコール